
ミステリーナイト 1

kaorin3518

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミステリーナイト1

【Nコード】

N7336P

【作者名】

kaorin3518

【あらすじ】

作者が17歳の時に体験した不思議な出来事

UFO 宇宙人 古代遺跡に熱烈な関心があった17歳の頃
あるとき出会った1人の男に出会ったのをきっかけに宇宙人 第2
の地球というとてもない想像の世界が現実的になっていく
フィクションである

ミステリーナイト

人には皆一度や二度、不思議な経験をした夜があると思う。

それは様々な体験かと思うが忘れられない体験であることも事実ではなからうか？

これからの話しは私が体験した不思議な夜の話で一夜の夜から始まって仲間三人で謎を解いていこうとした話し。

1977年 17歳の夏 私たちは毎日非行に明け暮れて仲間たちと過ごす時間に酔いしれていた。 北海道帯広市、小さな町で私たちは毎日を過ごしていた。

シンナー、煙草、喧嘩、恐喝、家出、無免許運転 ありとあらゆる非行を重ね、地球は自分たちの為に回っていると思い込み日々が過ぎて行った。

仲間はいくさんいたが、その中でも特別仲が良かった陽子とヒロミ。私たちは非行以外の趣味の部分でも気が合った。特に考古学的なものや宇宙、はたまたUFOなどといった超常現象的な事にも熱心に朝まで語り明かしていたのである。

たくさんの方にそれらに関する書物を読みあさっては一睡もせず熱く語っていたのである。

もちろん書物は全て万引き。

その当時一大ブームで話題を呼んでいたのが「第3の選択」という突拍子もない話の内容で地球以外の星に第2の地球を人類が計画、そしてそれはすでに実行されているという物であった。それはTV放映もされ、月には宇宙人の基地があるとか、アポロのウソウ

飛行士は何かを見たのだとか、何度見てもあり得る話だったのだ。後にその「第3の選択」はやらせだったという結末で終わったが、そうは思えないくらい衝撃的な内容だったのだ。

当時私たちの溜まり場は陽子の母が経営していたミルキーウェイという今でいうカフェだった。住宅街にある小さな店だった。

店の名前は可愛いが不良の溜まり場で普通の客は滅多に入っては来ない店だった。

暇さえあればミルキーウェイに行き溜まっていたのだった。

帯広はとにかく星が綺麗に見える町で私たちは満天の星を見に良く夜中に出掛けていた

その当時流行っていたアースウインドアンドファイヤーの宇宙のフアンタジーを聞きながら星をみるのが好きだった。

ある日 月の出ない新月の夜大きなラジカセを持って無免許の原チャリでつもの小高い丘に向かった。陽子とヒロミと私はいつもこうして星を見に行くのだった

草の上に敷くシートを敷いてラジカセをセッティングしてお気に入りのアースの宇宙のフアンタジーを最大のボリュームにすると静寂な闇の中に曲のイントロが流れ私たちは一斉にシートに寝転び満天の星空を見上げるのである。

銀河系 天の川まで鮮明に見えるその光景は私達を壮大な夢とロマンの世界に旅をさせてくれた。

悠久の時間が流れても変わる事がなかったのであろうこの宇宙に身を置いてしばし神話の世界に浸るのである。

1分間にどれだけの流星が通り過ぎたであろう 願いを込めるわけでもなくただただ

プラネタリウムのような星空を時間を忘れて見ていたのである。

230万年光年彼方のアンドロメダ銀河 星座の数々 ギリシャ神話そんな星空を今ではすっかり見る機会もなくなってしまったが、も

し同じ丘で星空を見る機会があるのならクラシックを聞きたいかもしれない

宇宙の中に身を置いてるような感覚を味わいながら不思議な気持ちになっていくのだ

多分どんな人もきつと同じ気持ちになるのではないかと思うが何故かふと、懐かしさがこみ上げてくるのだ 記憶にはない懐かしさで意識が覚えているような感覚だ。

あり得ないが故郷を見上げているようなそんな気持ちになた事を今でもハッキリ覚えている。死んだら星になる・・・それはもしかしたら故郷に帰るという意味なのかも知れない。

毎日忙しい方もたまにはそんな満天の星空を眺めれる場所に出掛けて見たらいかがだろうか？現実とも過去とも例えられない宇宙の声に耳を傾けてはいかがだろうか？

私は宇宙は過去なのではないだろうかと思っていた。DNAが覚えている過去だと思える様になっていたのである。

3人は口を利くわけでもなくただ時間が止まったような空間でそれぞれ思いを宇宙に向けていた。

来た道を下って現実の世界に戻っていく。また今日の夜ミルキーウェイで会う約束をして。

謎の男

度重なる宇宙旅行をしたいつかの夜のことだ。

私たち3人は相変わらず陽子の店に溜まりエジプトやら宇宙やらの話しに盛り上がっていた。9時近くなって珍しく客が入ってきた。

40歳くらいのきちんとした身なりの男だった。陽子は愛想悪く笑顔ひとつも見せずに淡々と注文を聞いて珈琲を落としている

店には私たちが読む宇宙専門誌「ムー」がたくさん置いてあってそ

の男は何冊か取り上げてそれを見ていた・その手には「第3の選択」もあつた

私たちはそんな男を無視して途切れていたエジプトの話に戻った
スフィンクスは何を見ているのか、ピラミッドは何のために作られたのか、はたまたマヤ文明マ　マチュピチュの話しやらに花を咲かせていた

人間の祖先は絶対に宇宙人でオリオン座にあるどこかの星の住人が我々人間をDNAで操作して作ったのだとか17歳の私たちは根拠もなく話し続けていたのだった。

気が付くとその男はじつと私たちの話を聞いていたようでそれに気づき私たちは話をやめた。男はいきなり私たちに言った

「とても詳しく勉強してるんですね、貴方たちは宇宙人を信じているんですか？」

と真面目な顔で聞いてきたのだ。

もちろんYESと答えると男は「貴方たちの好きな面白い話を聞かせてあげますか？信じなくてもいいですがきつと面白い話ですよ」と優しい顔で私達を見つめていた

好奇心いっぱい私たちがNOと言うわけはなく　陽子は店の外の看板を消して店じまいをして男の話しを聞く体制をとっていた

私はゾクゾクしていた　これから聞かされる話が何だか重大なことのよう感じたのだった。

男は言った。「これから話す話は僕の親友の藤原という男の話で今は地球にはしばらくいないんだが後に帰って来たときに会わせて上げるよ」

地球にいない？頭がおかしい奴だと一瞬思った。だが間違いなく私たちよりはまともに思える男で質問する間もなく話しは続いた。

男の話を簡単に説明するところだ、親友の藤原は子供の頃から不思議

議な力を持っていたらしく「お星様からお友達が遊びにくるんだ。そして僕はその友達の星に遊びに行くんだよ」と変わったことを常に言っていたらしい

藤原にはエスパーのような力もあったらしく人の心を読み取ることが出来るらしくそれが原因で会社も何度も首になったりしたそうだとにかく世間からは変人扱いをされていたみたいだ。

男は藤原に重大な秘密を打ち明けられた

それは男に信じれという方が無理な話だったという。

打ち明けられた秘密を理解するのに長い時間がかかったらしい。今も100%ではないくらい摩訶不思議な話だったことに間違いないらしい。

秘密

帯広市は大きな川 十勝川と札内川で成り立つ町だ。全国的に水が美味しいので有名だ。

話しはそのふたつの川が舞台だった。

あるとき藤原は星から来た友達に 十勝川と札内川の合流地点に来るように命じられて行くと銀色の光る物体から異星人が降りてきて藤原に任務を伝えたと言う。

その任務とはこの地球があと50年くらいしかもたないという事を告げられた上で第2の地球を作るために選ばれた人間たちがすでに火星で研究を重ねているというのである。

それは過去にも繰り返されているという。その度には選ばれた者だけを運んでいたというのである。いわゆるノアの箱舟だ。火星には科学 物理 生物 それぞれのエキスパートたちが第2の地球を作るために働いていると言うのだ。

体が凍りついた。第3の選択のTV放映に火星が映し出されていた。しかも酸素が存在しないと言われていた火星の空が地球のように青かったのだ。酸素がある証拠だった。

だが後にNASAが画像のミスだったと公表している 隠蔽が行われていたのか。

過去火星に生物がいたらしい 火星の危機でその生物たちは地球に移住してきたというのだ。その末裔がマヤ文明 エジプト 考えられないくらい文明を築いた異星人だというのだ。

男は続けて話をした。

彼ら異星人の基地は地球の衛星月だというのだ 月の内部はほとんどが空洞になっていてそこが彼らの基地であり月は巨大な母船と考えたほうがいいと。

何かの本で読んだ事があった 月の体積が考えられないくらい軽くなるで釣鐘のようだと

あるTVの番組では月のクレーターからたくさんのUFOが飛び立つのを見たこともあった。異星文明によって基地化され、常に地球は監視下に置かれていたというのである。

藤原は月から飛び立ったUFOに導かれ十勝川と札内川の合流地点から火星へと仕事をしに行っているのだ。

男の話の途中で私は思い出したことがあった。

2、3年前に帯広の隣町の音更町で整骨院を営んでいた叔父さんが夢に見たとおり十勝川と札内川に行ってみると宇宙人から杖を渡されて、その杖を患者の患部に当てるとたちまち完治するという話しでその人は全国的に有名になり当時ウィークエンダーというTVのニュース番組にも出ていたり 微笑という女性誌にも大きく取り上げられていたことがあったのだ。何故十勝川と札内川の合流地点なのか想像も付かなかったが好奇心に胸がふくらんでいてももちろん後に私たちは足を運ぶことになるのだった。

私たちは男にその場所を聞いた。

意外と近くにあることに驚いたが、今夜決行してみようと3人の脳

裏は同じであった。

そして男が藤原の住所と電話番号も教えてくれたのだ「機会があったら一度電話してみたらいいよ」快く話を聞かせてくれるというのだ

狐につままれたような話を3時間あまり話して男は帰って行った。

私たちは足代わりに友人のヒロシを呼んで早速車で向かうことにしたもちろん十勝川と札内川の合流地点にである・

時計は午前2時を回っていた。

河川敷をしばらく走ると川に下りる細い道があつて背丈まである草が不気味にライトで照らされていた　すると少し広場になったような場所があつて行き止まりになっていたが川が合流していたのでそこがそうだと確信していた　何とも言えない空気に包まれたときであつた。車のラジオが急にノイズとともに止まってしまったのである。私たちは恐怖に耐えられずとりあえずその日は退散して昼間見にくることにした

次の日の昼間3人は原チャリで集合して夕べの場所に行つてみたのである。

明らかに人工的に作られたような広場だったが何故かそこは現実の場所ではないような気がしてならなかった。音更の整骨院のじいちゃんも藤原もこの場所で宇宙人とコンタクトを取っていたのかと思うと興奮はしたがやはり恐怖のほうが大きかった。

何故ここなのか・・・また同じ疑問が私の中で炸裂していた。

私たちは次に藤原にコンタクトを取ることを試みた。

陽子の店で会つた男の名前を言つて話を聞いたといえれば何か教えてくれるはずだ。

午後8時を回つた頃陽子の店からダイヤルを回した電話に出たのは女の人だった。多分奥さんなんだろう

私は男のことを告げて私たちが全ての話しを信じていて、その上で藤原に会いたいのだと彼女に言った

最初は困惑していた彼女だったが、「今主人はいないんですよ 話を聞いたのなら言いますが今上に行っています。」その一言で十分だった 彼女が何を言いたいのか私には分かったからだ。電話を切つてなかなか答えが出ないことに私たちはまた朝まで想像力を生かして話をしていた。

陽子の店に突然現れた男、その男から聞いた藤原の話、十勝川と札内川の合流地点でのコンタクトの話し、それ以上調べようがなかった私たちの無知さだったがそうして短い17歳の夏は終わったのであった。

だが、話しはそれだけではなかった。

時が過ぎて1986年6月 私はある新刊の本を手にとって衝撃を受けた

カールセイガン、天文学者が書いた本「コンタクト」だった
地球外知的生命体探査プロジェクトもし本当に宇宙人が発している電波を受信したら世の中はどうなるか？

を描いたカール・セイガン博士の最初で最後の小説である。

当時帯広の地方新聞でも大きく取り扱われたのである

それは宇宙人とコンタクトを取る場所が十勝川と札内川の合流地点だということをカールセイガンが小説の中で描いていたのである

後にハリウツドの映画化もされたが カールセイガンは帯広など訪れたこともないはずで驚きと疑問が駆け巡った

何故、十勝川と札内川の合流地点なのか！

もしかしたらカールセイガンも選ばれた人間なのだろうか。

17歳のある夏の夜に突然聞かされたミステリアスな話は決して終わりではなかったのである。

世界的に有名な天文学者、作家のコンタクトと言っ本につながって
いたのである。

彼に可能であれば聞いてみたい

何故。十勝川と札内川の合流地点だったのかを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7336p/>

ミステリーナイト 1

2010年12月30日23時59分発行